

菅季治：「文芸的心理学への試み」序説(その2)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-07-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小田切, 正 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007930

菅 季治：「文芸的心理学への試み」序説（その2）

小 田 切 正*

菅 季治（1917～1950）の主としてスピノザ（B. Spinoza 1632～1677）哲学による「心理学への試み」の特質と、その心理学的論述について考察するのが、本稿のねらいである。人間が他の人（他者）をみとめ、他者からみとめられる相互の人間関係がなりたつには、なによりも自由で平等な、たがいの人格がみとめられるということがあってのことである。自分と他者とを一体のものとみなし相互にはたらきかけあうことのなかに、自分（他者も自分）を見出していくというのが、人間のあり方である。菅が、戦争・国家・権力・支配という総力戦のなかで、人間どう生きるかを問いながら、その哲学の課題としたのも、この相互の関係の基本についてのものだったのである。（「哲学の論理」にくわしく展開されている）

私の手もとに、菅が使用したスピノーザ「哲学体系」（原名倫理学）（小尾範治訳，昭和2年発行 岩波文庫）がある。これには、菅がつけたいくつもの傍線のものと、赤鉛筆で三ヶ所、つよくうったものが目をひく。その一ヶ所は、概括するならつぎのものである。

「われわれの存在を維持し、その活動能力を増大するものを善といい、これにたいしてわれわれの存在の維持を妨げ、阻害するものを悪という。こうしてわれわれは、あるものが、われわれの喜びとなり、あるものが悪となるものであることを知るのである」（第四部 人間の屈従、或いは感情の力について 下線は菅のもの）

戦争真ただ中の菅の哲学ならびに心理学的論述の前提は、このなかにいいつくされているといっていよい。人間、どうあるべきか、どう生きるべきか、の目標をかかげるといふよりか、まず人間、どう生きているか、どうあるかのほんとうのあり方（欲望、感情——よろこびとかなしみ）をあきらかにすることが、根本と考えられたのである。人間のあり方とは、なによりも自分をまもることであり、自分を維持し、肯定されることをのぞむものであり、けっしてきずつけられ、屈従すること、否定されることをのぞむものではないということである。

菅の遺著「人生の論理」は、戦中に書かれたことを基本にしているが、人間、どうあるかのありのままのあり方と、その生き方を凝視し、観察・記録（主として文学・哲学・思想と菅自身の人間観察による）したものであり、同時に、その日常性、通俗性にたいする、するどい批評をとおして、人間、どう生きるかをふかく問うものとなっている。末尾には、資料として「愛」「競争意識」「世間」「卑屈」の各節を採った。

（キーワード：菅 季治 スピノザ 欲望・感情 人間の自己同一 生きる意欲）

*前北海道教育大学旭川校

1 はじめに—学徒出陣のとき

昭和18年10月2日、政府は「兵役法」にもとづき、大学、同予科、高専の在学生の徴兵延期を停止することを勅令で決定した。この「延期停止の趣旨」には「大東亜戦争現下の決戦的段階に即応して……必勝体制強化のため陸海軍所属の幹部を補充する目的をもって学生の徴集延期の従来の制度を今回全面的に停止したものである」とある。一部の理工科、医科などの学生をのぞいて、12月1日、総数13万余といわれる学生が、ひとり残らず戦場に送り出されることになった。戦局は、日本の後退を決定的にし、転機をむかえていた。

菅 季治が「人生の論理」の“原理”を書きあげたのは、9月6日と日記に記されており、「哲学の論理」については、11月2日とある。召集を予知しながら、その直前までこの著作に没頭していたのである。¹⁾ 下宿していたのは、京都市西京区山田出口町29番地の「山六」（料理屋）の二階である。²⁾ いくつものノート、メモ書、日記等を遺しているが、わら半紙の四つ切り、それも嘱託教師であった（府立第5中学校）、数学、英語、物理などの試験問題の裏紙に「緑の板」という断片を書いている。³⁾

緑の板（1943, 11, 20）

(1) わたしは、書きつける、緑の板に、わたしの感じや考えを。そして伝える。若い魂に。その緑の板がなつかしい。かれにうたをささげよう。

きみは緑のからだ。うっすらとにじむ白い汗。きみはすなおだ。なんでも受け容れてくれる。拙い文字も、乱れた思いも。そしてきまじめに伝えてくれる、若い眼の多くに。

(2) ものすごくたくさんの血が流れている。いったい何のためか？大東亜共栄圏をつくるために

(3) しょくん、しょくん、テンノウとかコウシツとかゆうものをもち出されると、畏れ多いと頭を下げる。しかし、考えろ、いったい、テンノウがなぜ尊いのか？と。そんなこと考

えちゃいけない、と言うやつがいる、また考えたってわかるもんじゃないとも。

けれども、ほんとに尊く畏れ多いものなら、それを考えれば考えるほど、尊さありがたさがしみじみ魂にしみこむものでなければならぬはずだ。しょくん、ごまかさちゃいけない。よく考えろ。それを考えるな、などというのは、何か後ぐらいところがあるんだ。手品な種が、ばれそうなんだ。（(4)(5)(6) 略）
(7) 歴史と理性（一）

すべてのものがそれ自身であること、自己同一こそが、すべてのもののほんとうのあり方であり、それがいわば宇宙の意欲なのである。そしてこの宇宙の意欲にもとづいて、それぞれ自分自身であろうとはたらきつとめる。

人間も一つのものとして、その例外ではない。人間も人間であろうとつとめはたらくのだ。そして人間がつとめはたらいて人間自身に成り行くプロセス、それが歴史なのだ。もつと内容的に言えば、人間が人間らしい生き方、ありさま——あらゆる技術と文化とかはそうしたものである——を組み立て豊かにしてゆくプロセス。

(8) 歴史と理性（二）

ところで、そのように人間が人間になること、人間の自己同一は、人間に固有な力によってできるものであり、人間とゆうものの本質のあらわれであるはずである。人間に固有な力、人間の本質とはなんだろう？それは考える力、理性である。（中略）だから歴史は、この理性の力をますます強め広めてゆくことによって進むのだ。（以下(9)～(17)略）

「国の政治が国民の理性の目を鈍らせ、非合理の暗闇と乱れとの中に誘い入れる」のは、人間を人間でなくし、歴史をはばみ、逆もどりさせるものだ、とも書いてある。宗教や哲学における神秘主義、あらゆる非合理主義にたいする批判が、菅の哲学、人間についての基本の考え方であった。人間が、その本質によって人間ら

しい生き方をすること、ほんとうの人間のはたらきをすること、そのプロセスが歴史でもあるのだ、というのである。18年11月26日、午後5時、京都駅前広場に、五中生徒が、教師の制止をふりきって100名近くが集まった。日記によると、このとき「三人姉妹」（注、チェホフ、1841-1904、1900年の作品）の人物、トウーゼンバハのせりふと藤村詩集序を読む、とある。おそろべき欺瞞と、出口のない空しさにたいする抵抗とともに、子どもたちへのつぎの時代を期待したメッセージであったと考えられる。⁴⁾

（合本詩集初版の序）

遂に、新しき詩歌の時は来りぬ。

そは、うつくしき曙のごとくなりき、
（略）いずれも明光と歌声と空想とに酔
へるがごとくなりき

うらわかき想像は長き眠りより覚めて、
民族の言葉を飾れり。

……。自然はふたたび新しき色を帯び
ぬ。（中略）

誰か旧き生涯を安んぜむとするものぞ。
おのがじし新しきを聞かんと思へるぞ、
若き人々のつとめなる。

生命は力なり。力は声なり。声は言葉なり。
新しき言葉はすなわち新しき生涯なり。
（以下略）

2 人間の欲望と感情について

－「文芸的心理学」とは

本論にはいろいろ。菅は、「死の家の記録」（ドストエフスキー、1862年）の主人公たちについて「自由をもたぬ人間」「自分の思い通りに生きていけない人間」「縛られて、縮（し）めつけられている人間」が、その抑圧と支配から、どのような「代償」としての行動をするか、そのさまざまについて書いている。

人間の行動には、その行動のもととなるエネルギーがひそんでいる。目的と手段とがつりあいがとれているばあいもあるが、そうでない〈欲求不満〉や〈反動〉といった行動のばあい

もある。多くのばあい人間は、抑えつけられて無力でいるということは耐えられないし、すねたままでいることもできるものではない。失望しつづけるということはかえってむずかしい。自分がこう否定されたままではいられないとしたら、人間、その生をどう生きるかをあきらかにすることが、きわめてだいじな課題になる。菅が、「人間が人間になる」（自己同一）のは、そのはたらきによってだ、といったのは、戦争という、どんな自由への通路もゆるされない抑圧のなかで、生きることと、ほんとうのあり方を求めた、精いっぱい努力を意味していたのである。

菅は、前号の引用につづいて、「死の家の記録」から、さらにつぎのものをあげているのも象徴的である。

「死の家」においては、祭日はきわめて厳しく、うやうやしく守られる。「囚人たちは、この祭日を守ることによって無意識ながら、自分があたかも自由の世界に觸れているように、ひいては、全然、見棄てられた人間でも、また破り捨てられたぼうきでもなくて、監獄にいても、世界の人びとと同じように感じていたのである。」また教会での彼らのふるまいも同じ気持からであろう。『囚徒たちの祈り振りは熱心を極めた。彼らはみな教会へ来る毎に、なけなしのふところをはたいて、ろうそくを上げたり、献金したりした——「おれだって同じ人間だあ」それをしながら彼らはたぶんこんなふうに考えるか、感じるかしていたのである。「神様の前へ出りゃ、誰だって同じだあ……」』⁵⁾

菅が指摘したかったのは、人間だれもがみなひとしく対等だというあこがれとともに、自由に生きたい、というあつい要求と情熱をもっていることについてである。菅はこうもいう。おまえはわるい人間だ、と相手からいわれ、「人でなしだ」と、一人前にあつかわれることがな

いとしたら、その人間はいったいどうなるか、と。人は、苦痛のまま、無力のままにいるということは、とうていできないのである。人間の、自分自身であろうという欲望は、はげしくつよい。「おまえの生き方は、不完全だ」と思いしらされては、やりきれないのだ、とくりかえし書いている。

人間の生の欲望（自由な自己実現、「自己同一への欲望」）がどれほどつよく、はげしいかの心理や生理を描字するのに、菅がシベリアのラーゲル（監獄、収容所）の囚人をあげているのも、後年、菅自身のシベリア抑留の体験をかさねていうなら、やりきれない思いがするが、ロシア民衆によせた菅の洞察力のたしかさと、的確さがしめされていて、感慨ぶかいものがある。たとえそうした囚人であれ、面とむかって「おまえは悪人である」「不完全だ」といわれたなら、自分がささえきれないというものではない、というのである。

菅が、ゴーリキー(Maxim Gorkii 1868-1936)の「わたしの大学」(1923)から、つぎの物語りをあげているのも、ラーゲルと人をするうえで参考になる。

『(ローマシの話) おれがシベリアに流されていた時、一人の流刑囚がおれに話したことがある——奴は泥棒をしていて、奴のところには一つの組が五人もいたんだ。そこでその一人がいいだしたんだ——兄弟、泥棒はやめよう。どうせ意味がねえ。いい暮らしはできやしないんだ！ところが、そのために彼らはこの男が酔っぱらって眠っているとき、絞め殺してしまった。話した男は、殺された奴のことをとてもほめていた——おれはその後、三人殺したが、惜しいとは思わなかった。だが友だちだけはいまでも惜しい。利口で、愉快で、心のきれいな、いい友だったというんだ。

それで「何だって君はそれを殺したんだ——とおれはきいた——裏切るのをおそれたのか？」するとふんがいしたよ。——「いいや、

奴はどんな金をもらったって裏切るようなことあしねえ、どんなことがあっても！だが——みんな奴と何だか調子がわるくなってきた。みんな罪があるのに、奴だけまるで義人みたいになりあがって、よくねえや」というんだ』

6)

極悪人といわれ、「人でなし」といわれている者も「自分を完全な、よい人間として肯定する（ことを欲望する）」ものだ、と菅はいう。自分が普通の人間であること、わるくないこと、けっしてはずかしいことではないなど、そのことに即して、自分について弁解をし、自分をまもることをするのだというのである。そのさまざまな「(自己)弁解」と「自己同一への欲望」(自分を肯定したい、否定されたくない)のあり方について、じつに豊富な作品からその場面の登場人物をあげ、みきわめようとするのが、菅の肉迫の姿勢である。人間は、自分でありつづける(「自己同一」)ことを欲望するものなのである。⁷⁾

もうしばらく菅にきいてみよう。スピノザ(B.Spinoza 1632-1677)によれば、人間は、自分自身ならびに自分の活動が、他人から賞賛される(またそのことを「表象する」「観念する」ことをとおして)などして、よろこび(快)を得、それがさまたげられるにしたがって、かなしみ(不快)を感じるのだという。また自分が他と比べて特殊のものであったり、他人にないものが自分にあったりするとよろこび、その反対に自分の活動が他と比べて劣ったものだったりするとかなしみ、それをないものにしようと努力をするものだ、というのである。しかも相手をまげて理解したり、自分について弁解したり、修飾したり、ぶつかりあうのを延期したりということもするものである。

こうしたよろこび(快)、かなしみ(不快)および欲望(感情)から、愛、憎しみ、ねたみ、不安、おそれ、希望といった、われわれの本性や外部の対象に刺激された、きわめて多様な心の動きが生ずるという。菅は、子を失った親の

なげき、恋を失ったもののなやみ、死、破産、没落といった不運、不平のもたらす不快についても書いている。

スピノザは、こうした外からの受けとる感情を受動的な感情とよび、これにたいして自分自身、ならびに自分の活動について、しっかりした観念のある感情を能動的な感情とよんでいる。この後者の精神がはたらくかぎり、よろこびの感情が人にもたらされるとされ、他の人をたすけ、交わりを親密なものにしようとするのも、この欲望があってである、とスピノザが述べているのも注目すべきことである。

菅のスピノザ理解については、すでに13号でもふれたが、すべての欲望・感情は人間の本性そのものであり、自然のものである、というのがスピノザの核心であり、また人間、いかなる感情も自然の必然と理解されねばならない、というのが菅の基本でもある。ここでこれからの展開のカギとなる、「快（よろこび）・不快（かなしみ）」論の骨格をつぎにあげておこう。

「精神は、自分自身及びその活動を観察する場合には、快を感じ（且それが自身及びその活動力を一層分明に表象するに従って、益々多くの快を感じ）る」（スピノザ「エチカ」第三部定理第五十三）「精神は、その無力を表象する場合には、まさにそれによって不快を感じるであろう」（第三部定理第五十五）つぎに完全が自己同一を得たあり方であり、不完全が自己同一を得ないあり方（である）…「快（注よろこび）とは、人がより小さな完全からより大きな完全に至る移行である」（第三部、感情の定義 第二）「不快（注、かなしみ）とは、人がより大きな完全からより小さな完全に至る移行である」（第三部、感情の定義 第三）（注、下線は原文では傍点）⁸⁾

こうして各人の感情は、各人の本性にしたがって、その快（よろこび）も不快（かなしみ）も

その刺激に応じてうつりかわり、変化し、移行するものだということである。生まれながらにして完全なよろこびというものがあるのではない。したがって快とは、あるものからより大きなものへの感情のうつりかわり（移行）をさしているものであり、不快（かなしみ）とは、あるものから、より小さなものへの感情の変化（うつりかわり、移行）をさしていることになる。「より小さなものからより大きなものへ」「より大きなものからより小さなものへ」の、欲望のある状態からある状態へのうつりかわりと変化のあり方が、人間の感情についての、根本の問題だということになる。（スピノザは、この定義にしたがって、対象とかかわる、驚異、愛、憎しみ、好感、反撥、帰依、希望、恐怖、絶望、歓喜、落胆、ねたみ、同情、高慢、名誉、恥辱、思慕、競争心、感謝、怒り、復讐心、残忍、名誉欲、食欲、情欲などの、感情についてあきらかにしている）

3 『不快に関する現象』について

生きるとは、休みなく欲望することである。それは同時に、「わたしたちの物質的、精神的存在の絶滅、散佚にたいして（注、抵抗して）自分を肯定していく」（アミエル）ことでなければならない。菅のいう「人間の自己同一への欲望——自分でありたい、自分を肯定したい、自分を否定されたくない気もち…こんなにも強い」とあるのも、やはり同じ菅の思想につながっていることである。また、人間が、人間であることをあり続けるのは、「宇宙の意欲」「望み」だともいう。⁹⁾

さて、そのように人間が人間（自分）になることを求めている、それが果たせないとしたら、いったいどうなるかが、人間の（不完全な）あり方の問題であり、苦悩であり、「より完全である」ためのあり方がいろいろ試みられることにもなるのである。「不快」（かなしみ）とは、「より大きな完全なあり方」から「より小さな完全なあり方」のうつりかわりである。少しながくなるが、『「不快」に関するいろいろな現

象』から、菅の考察をたどってみることにしよう。「不快」が中心の考察とされるのは、それが人間の矛盾のあり方だからであり、自分自身であるためには、この矛盾にはたつきかけていくほかない、と考えられるからである。まず、「三人姉妹」（チェホフ）に登場する、チェブトゥイキン（老軍医）にきくことにしよう。人間にとって不安ほど大きなやみはないのである。

チェブトゥイキン （略）つまりおれが悪いのだ。そうだ…二十五年も前にはおれは何かにか知っていたが、しかし今では何にも覚えていない、何一つ。ことによったらおれは人間でないかもしれない。（この通り、おれには手も、足も、頭もあるふりをしているだけなんだ。）事によったらおれはまるで存在してないかもしれないぞ。おれは歩いたり、食ったり、寝たりしているような気がするだけかもしれないぞ。（泣く）おお、もし存在していないとしたら！¹⁰⁾

「事によったらおれはまるで存在していないかもしれない」——これほどの不安、これほど人間をおびやかすものはない。ここでは、くわしく述べられないが、菅には、時代の閉塞の中に自由をもとめながら、チェホフにひかれ、その作品群の読破に精魂をかたむけたときがあったのである。

「人生の論理」にチェホフの作品が多く引用されているのも大きな特徴であり、そのなかに「退屈な話」（1889）「決闘」（1891）「追放されて」（1892）「桜の園」（1893）「かもめ」（1895）「ワーニア伯父さん」（1892）「可愛い女」（1897）など、そのほか「追憶」（ゴリキー、1901～1926に書いたものを収録、現在、湯浅芳子訳、岩波文庫）の「チェホフ」などである。なかでも菅が愛読したのは、「三人姉妹」であることは知られている。征くとき、五中の生徒にさいごの挨拶の一つに選んだのも、冒頭でふれておいたトウゼンバッハ（陸軍中尉）

のつぎのせりふである。

トウゼンバッハ なんという下らんことが、なんというバカげた些細なことが、ときどき生活のなかに意義を持つようになるのか、ついなんということなしに。相変わらずそれを笑い、下らんことだとしているのだが、それでも歩みだしたら足はとめられず、停まる力がわが身にないことを感じる。お話ししますまいこのことは。（中略）行かなくちゃ、もう時刻だ……そらこの樹は枯れてきた。だがそれでも、まだほかの樹々といっしょに風に揺れている。その通り、もしぼくが死んでも、やっぱりぼくはなにかの形で生活のなかに加わるだろうと思う。さようなら（略）
（下線は筆者のもの）¹¹⁾

こうもチェホフにひかれたのは、しっとりした口調ににじませた生活の哀歎とともに、遠いかすかな希望と期待が心憎いほど描かれているからであろう。これらの会話には、ロシア将校（注、貴族将校、かれらには、ニコライの圧制に反対の意思表示をした、1825年12月14日の「デカブリスト」の叛乱の歴史がある）の、戦場へいく者の空しさと、死して後の、（風に揺れる樹々に）生への痛切な思いが語られており、またチェブトゥイキンには、生の根源的な不安が語られていて迫るものがある。いうまでもなく、それぞれの会話が、菅の無念さをにじませたものであり、決別の言葉をふくんでいていっそうつらい。菅は、「自己同一を失った矛盾したあり方」が不安そのものだ、という。闇のようなはらいのけられない根本の不安、そのようなものとして「ワーニア伯父さん」からは、つぎの会話をあげている。

「ワーニアのなげき——もうじき雨が上がるだろう。そして自然の万物は生きいきとよみがえって安らかに息をつくことだろう。ただわたし一人だけは、嵐もよみがえらせることができないのだ、自分の生活は永遠に失わ

れたという考えが、昼も夜も絶え間なしに、まるで魔物のように、わたしを苦しめるのです」（注、このあと「（上略）それでも僕は、人間らしい愛情を持っているつもりです。だがそれを、一体どうしたらいいんです？僕の人間らしい気持ちは、まるで穴ぼこに射した陽の光のように、空しく消えてゆくんです。そして僕という人間も、自滅してゆくんです」と続く）¹²⁾

以上のように、多分に菅自身の戦中体験を色濃くにじませているが、人間が「否定されるあり方」の心理について、不安と不満、傷心と落胆、憂いと不本意、心細さのありのままを記述すること、そうした「不快」（かなしみ）にたいして、どうこれをしりぞけ、脱けでて自分自身であろうとするか、その「現象」のさまざまをとりあげたのが、以下の考察である。その「心理学的論述」と思われるものをつぎにあげてみよう（以下、すべて要約。（ ）内は、菅が例示、参考にした主な文献など）

（1）「不快」なことは、思い切り、思い直しをする。「なあに、もう過ぎさった事だ。いつまでもくよくよしていても始まらない。あっさり水に流して……」などと。（「ワーニア伯父さん」「啄木詩集」、一茶など）

（2）こんどは、自分の欲望が満たされる空想また思い出にふける。「人は、本当の生活がなければ、幻に生きるんだよ。とにかく何にもないよりはましだからね」と（万葉集）

（3）自分ひとりでは堪えきれなくなる。かなしみにおしつぶされてしまうのである。そこで他に打ちあけ、いくらかでも自己同一を回復することをするものである。（万葉集、「一握の砂」、「三銃士」、「死に至る病」）

（4）「不快」な人は孤独になる。ひそかな打ちあけ相手としては、もう他人がだめなことをしる。ときどきこのような孤独の人は、胸の悲哀、絶望をきわめて巧みにカムフラージュする。「外見上、まったく察しがつかないほど（誰にも思いつかないように）」「秘め

ておく（偽装）ことに心を配るものである。（「死に至る病」「悲しき玩具」など）偽装は、疲れるしごとである。不当なのである。

（5）自分の不幸を多くの人々に共通、あるいは必然のものとして普遍化してみる。何も自分だけに限ったわけじゃない。「浮き世の定め」「世のならい」「人は死す」「こんどの戦争じゃどこの家だって、戦死者の一人や二人は出ている」など。

（6）ここで「不快」な人は、いっそう自分の欲望そのものを否定したくなる。欲望がなくなれば、その満たされぬ欲望もなくなる。

（7）こういうやり方がある。自分が得られなかったのをわるいやり方として否定する。「よかった、これでおれも人間の品位を汚さないですんだ」と。（魯迅「高先生」、スピノザ「エチカ」など）

（8）しかしなんとか自分の現状を肯定することができないだろうか。宿命論者になる。「これがおれの運命なんだ」「おれはおれの十字架を背負っていこう」と。（「死に至る病」「追放されて」「桜の園」「悲しき玩具」「死の家の記録」）

（9）どのやり方も効果がない。どれも肯定することができないのである。このあり方のままでは、なんとしても「不快」である。雑誌、映画、快楽、仕事……いわば「自己疎外」（「ツアラツウストラ」「彼岸過迄」「死に至る病」、ヘーゲル、啄木など）

（10）仕事によっても不快なわけを忘れ、晴らすことができない人がいる。自己はやはり自己なのである。（漱石「こころ」、「死に至る病」）

（11）だれも、なにもいまの「不快」を忘れ、否定さしてくれない。このような「絶望者」はどうするだろうか。漱石は、「芸術的態度」——「非人情」の世界を説いている。「茫々たる薄墨色の世界を、幾条の銀箭が斜めに走るなかを、ひたぶるに濡れて行くわれを、われならぬ人の姿と思へば、詩にもなる、

句にも詠まれる。(略)」「(上略)詩人とは自分の死骸を自分で解剖して、其症状を天下に発表する義務を有している、と。」「(草枕)」

(12)けれどもはげしいかなしみ、ひどい悩みもある。はたして「非人情」の立場が成り立つか。自分を嘲りののしりもする——きさまなんか馬鹿だ、無能だ、…と。こうした自己否定がおしすすめられると、「自殺」にもなる。」「(アミエルの日記」, 万葉集, 「一握の砂」)¹³⁾

4. どう生きるか—その心理学的論述について

以上が、「不快」に関するありのままの現象である。もちろん、すべて人間が、矛盾に直面していまのような経過にしたがうというのではない。それぞれ人間が、自己同一とするところも、各人の異なる本質にしたがって異なるものだ、と菅は書いている。したがって、各人がなにを欲望し、なにを快、不快と感じるかは、おのおの異なったものと考えられる。

たしかに、自分が否定されることが少なく、肯定されることが多ければ多いほど、そのあり方が完全ということになる。だが、それぞれ各人が、そのあり方をいいはり、それに執心し、わがままをおしとおして、他の人としばしばくいちがうということがある。他人をしたがわせようとすると、無理と強制がともなうし、そうすると大声で他をしたがわせるということもする。苛酷に、そのことを無理するなら、人に苦痛をあたえることになり、他から憎まれるということになる。人間を縛ること、支配すること、その本質を否定すること、菅は、このアポリアに直面し、「人間どう生きるか」を問ながら、ようやくこの時期、菅が到達していたのは、”すべての人間がひとしく否定されことなく肯定される”その全体のしくみの問題だったと考えられる。菅はそうしたそれぞれの人間が、肯定しあい、みとめあえるようなあり方を「心得ておかねばならない」として、つぎのように書

いている。

スピノザにしたがえば「たがいに肯定しあい、したがって助けあい、強め合う人びとの集まりが社会である」と。歴史の進歩と発展にかかわって、たがいの人間のあり方と、社会のあり方を同時に追求していたのが、菅の自己同一論の、もう一つの問題意識でもあったのである。人間が、その本質のままむきあってなお、もっとたかい、もっと完全な、もっと幸せな自己同一がどうあったらよいか、このことを問いながら、人間、社会認識の重要性を、かれ独特の用心ぶかさで指摘していたことも、注目しなければならないことである。(菅の社会認識へのアプローチについては、もう一つの遺著である「哲学の論理」の根本にもふれることになるので、あらためて、論及を試みたい。)¹⁴⁾

さいごに注目しておきたいのは、さきの菅の、「不快」についての考察でもわかるように、キエルケゴールの「死に至る病」(1849年公刊、斉藤信治訳、昭和14年11月初版、岩波文庫)から引用も多く、これをかりた追求もあることである。(ここでは、「死」とは、精神的な悲惨の絶頂をしめすものと考えられ、その「救済—往生」が主題とされている。)菅が読んだ、文庫版には、多数の、ふかく考えぬいたと思われる傍線が付してあり、そのキーワード、センテンスなど注目したものにはそれとすぐわかる目じるしがある。その序のなかで菅が、注目しているのは、つぎのものである。

『(上略) 基督教的な英雄的精神(おそらくこれはごくまれにしか見出されないものであるが)とは、人間が全く彼自身であろうとあえてすること、一人の個体的な人間、この特定の個体的な人間であろうとあえてすることである、——かかる巨大な努力のうちに、またかかる巨大な責任をひとりで担いながら、神の前にただひとり立つことである。」「純粹な人間のふうをしたり、世界史の運行に関してお託宣を並べたりするのは決してキリスト教的な意味での英雄的な精神ではない。キリ

スト教的な認識は、その形式がどのように厳密であろうともすべて配慮でなければならない。——これこそまさに教化的なるものである。配慮とは人生に対するすなわち人間的な現実に対する関係であり、したがって（キリスト教的には）真剣ということである。』（下線は菅のもの）

「死に至る病」の副題は、「教化と覚醒とを目的とする一つの基督教的＝心理学的論述」とあるように、菅にとってだいじなのは、この人間存在の「心理学的論述」が、スピノザとならんで、心理現象の論述にあたっての方法的な基礎づけとして考えられていたことである。同時にこのことと、なによりも注目しておきたいのは、「キリスト的な意味での英雄的な精神」とは何かの問いについてのものである。もはや「純粹」な人間のふうをしたり、「世界史の進行に関してお託宣を並べたりする」ことではない。「人間的な現実に対する関係」に目をむけた「真剣」さをわがものにすることが、じつにその「英雄的な精神」の内実だというのである。菅の、神秘主義ならびに非合理主義にたいする批判については、すでにふれたことであるが、人間、どう生きるかにかかわって、その「人間的な現実」と「関係」ならびに、自己の「真剣」な問いなおしが、すぐつついている菅自身の中心の課題だった、と考えられ、ここには、人間的実存について、菅の心理学的論述と人間心理への積極的な意欲が、伏線としてうごいているように考えられる。

<資料について——解説>

「人生の論理」のⅣ「現象的説明」の各節は、一 愛、二 憎しみ、三 競争意識、四 孤独、五 羞恥、六 弱い魂、七 世間、八 卑屈、九 禮儀、十 成り上がりと成り下がり、十一 たいくつ となっているが、ここではスピノザ哲学を展開させたもののうち、<資料>として、社会的批評をふくんだ 一 三 七 八

をあげた。この各節は、菅の人間心理の深層にせまる観点がひかっている日常性と通俗にたいする批判ともなっており、同時に、菅自身の戦中における社会・文化・教育、そして権力にたいする痛烈な批評となっている。本文とあわせて参考にしていただけると幸いである。

一 愛

人は、自分に快さを感じさせるものを愛し好むのである。（略）

ところで人が快さを感じるのは、自己同一を得、また保つ時である。したがって人に快さを感じさせるものとは、人を否定しないで肯定するものなのである。自分と全面的にか部分的にか同一であって、それと交わり結びつくことによって、自分が確立され、伸び広がる、といったようなもの——そういうものを人を愛し好むのである。このことをいろいろな現象についてしらべてみよう。

まず、親の愛について。長生きしたい、死にたくない、という人間の根づよい欲望。これは生物としての人間が、自己同一の存続を望み、生物としての自分が否定されるのをさけたいと欲しているわけなのだが、子孫に対する親の愛は、この欲望ともっとも深いつながりをもっているようである。すなわち、人が子や孫を愛するのは、生物としての自分の自己同一を自分と同じものによって補ない、こうして自己同一をもっと永く存続させたい、というわけではあるまいか？（以下かなり略）赤の他人より同じ一家一大家族の者の間に親愛がわくし、一つの釜の飯を食べた仲間、同郷、同窓、同志の間にも友愛が生まれる。また愛情や親しみのさまざまな示し方、増し方を思い浮かべてみたまえ。

たとえば、道を歩いている時、親しさをたがいに示したい人びとは、たがいに近づき、寄りそって一しょに歩くだらう。前方の人は立ちどまって待ち受け、後方の人は足を速めて追いかける。この行動を論理的に説明してみるとこうである。道を歩いている時、人は空間的存在で

ある。だから自分と相手との同一性は、空間的同一性、つまり「一所」になることとして示されるわけなのである。それでこのさい、二人が同一性を得てたがいに親しさを示しあい得る。

(以下略)

また、宴会を催して人びとが同じ料理を一堂に会して飲食するのも、そのように同じものを同じ時期と空間において食べたり飲んだりすることによって、親しさ、むつまじさを保ったり、増したりするつもりなのだろう。アリストテレスは言っている——『人びとは、「存在しているということが各人にとって意味するところのことがら」とか、「生きていることをそのために選ぶようなことがら」において、友人たちと時を過ごすことを願う。だからこそ、ある人びとは、ともに飲み、ある人びとはともに双六をし、他の人びとはともに体育や狩獵を行ったり、ともに哲学したりするのであり、いずれもそれぞれ人生における自分のもつとも愛するところのことがらを営みつつ、いっしょに暮すわけである。すなわち人びとは、友人たちとともに生をともにすることを願うがゆえに、「それにおいて生をともにしているという気のするようなことがら」を行ない、それを共同するにほかならない。』（「ニコマコス倫理学」1172a）逆の場合にあてはまる分としては、「去る者、日々に疎し」、またギリシャのことわざ「会同の足らざるによりて多くの親愛は解消しぬ。」（注、本文中、傍点を下線にあらためた）

このように人は、自分と同一であり、自分を肯定するものを愛し好むのだから、他人に愛されるためには、相手にとって他人であるところの自分を否定して、相手と同じにならなければならないのである。例えば、チェホフの「可愛い女」オレニカは、なぜ「可愛い女」だったのか？ それは、彼女がこうした自己否定、相手への同化の達人だったからである——自分自身の感じや考えを少しももてなくなるほどに。

また愛とはこのように自分と同じであり、自分を肯定するものにたいして感じられる気持ち

なのだから、人は、自分が愛する対象と同じように感じ考える。愛する者の楽しさ、悲しさは、自分自身の楽しさ、悲しさなのである。スピノザの言葉でいえば、「彼の愛するものが快あるいは不快を感じることを表象する人は、同様に快あるいは不快を感じるであろう」（第三部 定理二十一）

そしてまた、愛するもの、親しいものが失われたり、それと別れなければならない時には、自分がかずれ、破れさかれる悲しみ、つらさにおそわれるのである。（以下略）（二 「憎しみ」略）

三 競争意識

（上略）人の心に抜き難く根をはっている競争意識——そしてこの競争意識から名誉心や虚栄心も出てくる——とは、どういうものか？ 競争の目的は、他のものを超え、他のもの以上になる、ということである。ところで、その「超える」とか、「以上になる」とかは、より完全になることであり、そして完全とは、自己同一を得たありさまである。だから人は、自分以下のものに接する時には、自己同一が確保されている安心、得意さを感じるわけだし、その反対に、自分以上のものと並ぶ時に、自分の不完全さ、いたらなさの意識、そこからくる不快さを免れ得ないわけなのである。したがって、他のもの以上になろうとする競争意識は、自己同一を得たあり方、快いあり方への欲望の一形態である。

ホッブスは、人間の気もちのもつとも奥底に競争意識を見出した。彼はいう。「人間の心のすべての喜びや悲しみは、他人との比較における優劣の争いに存する。」だから、人間のもつとも根本的な欲望は、彼によると、他人と比較して自分の優越を感じ、かつ他人にもそれを認めさせて悦びたいという欲望、すなわち虚栄なのである。そして彼は、人生を一つの競争にたとえた詩をつくり、そのなかで、さまざまな激情を説きあかしているのである。

競争意識のいろいろな現象を調べてみよう。

(a) 人は自分以下のもの——自分より小さいもの、劣ったものにたいしては、自己同一が確保されている快さ——気楽さ、得意さ、肩身の広さを感じる。そしてその時にはわざとちょっとくらい自分を引き下げて——つまり否定して、かるいスリルを味わってみたくさえなる。芥川龍之助は書きつけている。「われわれの恬然としてわれわれの愚かしさを公にして恥じないのは、幼い子供に対する時か、——あるいは犬猫にたいする時だけである」(中略)

(b) その反対に、自分より勝り、自分を越えるものにたいしては、そのもののために自分が否定され、自己同一を損なわれるに惜しさ、残念さ、さびしさというような不快を感じる。(中略)

ところで人は、自分を否定するものを否定して、自己同一を得ることを望む。だから、自分を否定する、そうした自分以上の者にたいしては、積極的には、自分をその人と同じところまで、またはそれ以上まで向上させることによって、自分の損なわれた自己同一を回復したいという欲望、いわゆる奮発心を起こす。(ゴーリ「狂人日記」から引用、略す)

そして消極的には、自分以上の者を引きずりおろして——つまり否定してやりたい欲望、すなわちねたましさに駆られもするし、また自分以上の者が没落する時には、「ざまあ見ろ」「いい気味だ」といった快さを感じる。(注、本文中、傍点は下線にあらためた)(中略)「ラモー甥」のせいふ。(注、ディドロ、1713-84の著)「わっしは、誰かが人を讃めるのを聞いて、その讃辞に心秘かに憤慨しなかったことはありません。わっしは、やきもちやきなんです。彼らの私生活についてなにか体面にでもかかわるようなことをきき込めば、わっしは喜んでそれに耳を傾けます。それが彼らとわっしとの距離を縮めてくれる。そしてわっしは、比較的容易に自分の凡庸さに堪えられるってわけです。」(以下、漱石の「こころ」、芥川の「母」「侏儒の

言葉」からのものを略す)

さらにまた、卑しく低い人間、不幸せな恵まれない者ほど、ねたま深く、悪口や罵りのヴォキャブラリが豊かであることも、易しく説きあかされよう。かれらは、いつも自分以上の多くのものによって自分をおしひしがれ、おさえつけられている——つまり自分を否定されているので、なんとかして自分以下のものを見出だすか、つくりだすかして、自己同一を得ることに人一倍努力するわけなのである。このことをスピノザは「卑屈ほど高慢に近いものはない」として説いている。『卑屈は、高慢の反対であるけれども、卑屈の人は、高慢の人にもつとも接近している。なんとなれば、かれの不快は、かれが自分の無力を他人の力、あるいは徳によって評価することから起こるのだから、かれの表象力が他人の短所の観察に携わるばあいには、かれの不快は和らげられるであろう、すなわちかれは快を感じるであろう。「不幸の人びとには、不幸の仲間をもつことが慰めである」という諺は、それから起こったものである。(以下略)』

(注、スピノザによる)

(中略) 競争意識とは、このように「以上」と「以下」の論理にもとづいて、人が自分を否定する他人の否定を否定して、自己同一を得ようとする欲望の形態なのである。そしてまた、出世して多くの人々に迎がれたという名誉心、引用句の多さを誇るベタントリ、得点の多少を争う勝負事、さてはすれちがいざまに相手の装身具の金目を計算するなども、この競争意識につながっている。(三、四、五、六略)

七 世間

「真実にもっとも危険なこと、および最悪なこと(自己自身を喪失すること)が、世間ではまるでなんでもないかのように、きわめて静かに経過し得るのである。」(キェルケゴール「死に至る病」)

世間というもののあり方も、やはり論理的である。それは自分を肯定し、自己同一を得、また保とうとする。そして自分を否定するものを否定するのである。だから、非世間的な変人や天才などというものは、世間でつらくみじめな目にあうわけである。世間は、「変人」「変りもの」を、自分と異なり自分にてむかうもの、自分の安定をゆるがすもの、つまり自分を否定するものとして、否定しようとする。こういう人間を嘲りからかう、仲間はずれにする、爪はじきする。そして衰れな変り者が飢え死にしたり、行き倒れになるのを見て「ざまあ見ろ！」と喜び、いばる。（ゴーリキイの「幼年時代」からを略す）

また、すぐれた人が世間の生き方を超え、その不完全さを示したりすると、世間は怒る。「なにい、おれたちの生き方が不完全だ、おまえのように生きなくちゃならぬだって！なにぬかしやがる。おれたちの生き方はこれでいいんだ。おまえなんか完全であるはずはない。」そしてその人の優越性・完全性を否む。その人の誤り、うそ、缺陷を探し出し、つくり出す。その人にケチをつけ、泥をなすりつける。その人を引き倒し、引きずりおろす。自分たちにたいする否定性を奪いとろうとするのである。ゴーリキイはいつている。

『すべての人間には、傑出した人を自分に理解できる程度まで引き下げるといふ傾向があるばかりでなく、自分たちの足許、すなわち彼らが創り出した「凡俗生活」と名づけられている有害な泥ねいの中へ引き倒そうとする傾向がある』（「ウェ・イ・レーニン」、注「追憶」岩波文庫 所収）

チェーホフは「決闘」のなかで、フォン・コーレンにいわせている。「いったい、宗教上でも道徳上でも神人同形説に傾きがちな民衆は、自分と同じ弱点をもっている偶像が大好きなのだね。」

世間が自分にしたがわず自分を否定するものにたいする否定は、はげしくしつこい。「おれ

のいうことを聞かぬ奴は、生かしておかん」とうそぶく専制君主みたいなものである。世間のこのすさまじい否定性に打たれて多くの人は降服する。世間に「身売り」するのである。ハイデッガーの用語でいえば、ダス・マンに「頽落」するのである。世間は、ゆうゆうと羽をのばし、思うがままにふるまう。そして、世間に忠実に生きる人は、権力者に保護されているたのもしさ、安らかさを感じるものだろう。（以下、キエルケゴール「死に至る病」から。略）

アミエル（注、スイスの哲学者、1821-1881）は書いている。『「みんな」が偉大な勢力であり主権者であって、「ひと」と名づけられている。ひとが、ああでなく、こう着物を着る、食事する、散歩する、贈物をする、出ていく、入って来る。この「ひと」は、なにをやってもつねに正しい。パディシャ（トルコのスルタン）、もしくは誤りない法王とでも言おうか。「ひと」の臣民は、東邦の奴れいがそのスルタンの前に出た時よりも、もっと平伏する。君主の思召し通りに決定して文句をつけさせない。』『「ひと」がすべてのものの良心、判断力、嗜好、理性である。そこで各人が手を出さなくても、すべてのことが定まっている。何事によらず発見しようという労力を各人は免れている。「ひと」が当てがった手本を真似し、模写し、くり返してさえいけば、一つもおそれることはない。この世でもあの世でも救いが得られる。』

だが、世間に身を浸し、ダス・マンとしてのみあること——これは、自分を失い自分でなくなることであった。そして、それはまた彼の存在する意味の消失でもある。彼が、彼であることをやめ、「ひと」のようにのみあるならば、彼などというものがあってもなくても同じことになってしまう。ゴーリキイはいう。「若い時には、卑俗というものは、ただおかしな、くだらぬものに思える。けれども、それは少しずつ人間を取り囲んで、その灰色の霧をかれの脳髓や血液に毒や炭酸ガスのように滲みこませる。そして人間は、錆び蝕ちた古い看板に似てくる。

そこには、なにかが描かれてあるようだが、しかし何なのかが判別がつかない」（「ア・ペ・チエホフ」 注、前掲書「追憶」参照のこと）

”かつては、私たちもまた人間であった。
きみたちと同じく、悦び悲しむ人間であった。

いまはただ土くれた、ごらんのとおりに”
（ミケルアンジェロ）

そうした自分——自分のない自分をしみじみと見つめる時、人はさすがに変わり果てたわが身をなげかざるを得なくもなろう。（以下略）

八 卑屈

（上略）腰を真直ぐにのばし、堂々と立っている姿。そして自分がほんとうに感じ、いいと思うことだけしか、いいも行ないもしない。これこそ人間の自然な、自由なあり方、自己同一だ。

それなのに卑屈な人よ。きみは、いつも腰を低くぺこぺこ曲げて、おかしくないのにだらしない笑顔。ひたすらこちらのことばかり心がけ思いつめているかのようにしゃべりふるまう。まるで自分でなくて、テレンティウスの文句のように「人がいやといえ、わたしもいや、人がよければわたしもよい。つまりわたしや自分で自分に、万人のいうとおりにしろと命じたのさ。」こんなの、人間じゃないんだ。「死んだ魂」だ。そんなにやたらに自己否定するのは、不自然だ、無理しているんだ。

だから、きみはあやしい人間だ。キケロも「友情論」のなかでいっている。「他人の気もちや欲求によってばかりか、顔色や首の振り方に応じてさえも態度を変えるような人物の心ほど、変化の自在なひねくれ者は、またとないだろう。」

きみだって存在している以上、どこかで自己同一を回復し、自分を肯定する工作をやっているにちがいない。いやいや、内心の自己同一への欲求は、人一倍つよいはずだ。そんなに表面ではぺこぺこ自己否定しているんだから。きみ

は、かげでは人一倍ながく腰をのばすにちがいない。自分がおだてあげ、奉仕した人のいないところでは、きみはその人を引きずりおろすにちがいない。舌をだすだろう。かげ口をきくだろう。「おれに頭をさげさせるあんな奴、死んじまえ」などと呪うかもしれない。

あるいはきみは、上の者の前でおそれ縮めた自分より弱い者、小さい者のところで拵げているんだろう。「こうでもしなければ、からだがもたねえや」なんていいながら。ドストエフスキーが「死の家の記録」のなかで、ちゃんと例を示している。「自分より上の者の前に出ると、かれらは、全然、不必要なほど、多くの上官の反感をそそのほど、卑屈な態度に出るのである。しかし、自分以下の者にたいしては、ほとんど無上の権力者になりすましてしまう。」 鷗外も見ぬいている。

「世間の奴らにつきあってみると、目上に腰の低い奴は、目下につらくあたって、よわいものいじめをする」（「雁」）

だからスピノザは、きみみたいな人間について、「卑屈の人ほど嫉妬ぶかい者はない」というのと「卑屈の人は、高慢な人にもっとも近い」というのと、二つの法則を立てているのだ。
（以下略）¹⁵⁾

（注）

（1）入営直前までについては、田村重見「友その生と死の証し—哲学者 菅 季治 の生涯」（1987年 私家版）にある日記を参照のこと

（2）いまも「山六」（「山六」さんと呼ばれている）は、菅が生活した当時の、建物も二階の一室もそのままにある。五中時代の菅について、京都在住の河嶋 健爾氏から証言と案内をいただいたのが、1994年10月23日である。また「山六」の二人姉妹である、伊藤 都子氏、山口 善子氏の証言をいただいた。

菅が通った第五中は、桂離宮に比較的に近い桂川のほとりにあった。菅の担当は数学であったが、

河嶋氏の記憶にあるのは、いつも「なぜ」と考える人間になること、「世間にたいして顔色をうかがう人間になるな」「ありのままに生きよ」「自分を裏切るのは、もっと真理に反することだ」「なにごと足でたしかめること」「うそをつくな」など、戦争たけなわであっただけに、菅から受けた教育は、体にしみとおるような、強烈な影響をあたえたという。ここでは、すべて記録できないが、出征まえの夜、9時頃「山六」に菅をたずねたときの思い出がある。手帳ぐらいのノートを破ってドイツ語で、〃 苦惱を通じてよろこびぞ、定められたことはあらねばならぬ。さらばあれ、と書いてくれたというのである。「正直に生きよ」「犬死にするな」のことばも忘れられないという。

伊藤さんは、「菅さんは、とてもストイックな方で、よく本を読んでいらっしゃいました。軍人がもちあげられるような時代でしたが、人をみくんだり、時局に便乗するような方ではありませんでした」と、なつかしくふりかえってくれた。「哲学者だったのですね」と感慨ぶかく話されたのも印象的である。山口さんは、菅が出征のとき、見送ったなかのお一人である。そのときのことも語ってくれたが、ご両親が「すばらしいいい先生」だ、ということ語っていたのをいまも記憶しているという。いわゆる「徳田要請」問題がもちあがったなかでの、ご両親の菅への思いでもあったのである。伊藤さん、山口さんの女学生時代のことである。

(3) 「緑の板」は原文そのままである。

(4) 記録は、京都駅に集合したのは100名近く、学校はこの集まりを禁じたとある。

戦争たけなわのなか学校は、この措置をとったが、生徒たちはきかなかったのである。菅は、このとき、和紙に謄写した、つぎの文書を配布している。

＜人類えのことは＞

すべてのものは、それぞれそのもの自身である——これがもののほんとうのあり方であるのなら、人間にとっては人間であるのが、そのほんとうのありさま。そのほんとうのありさまとは、ただの物質ま

たは植物、動物とは異なって、ロゴスを知り考え行うこと。だから、理性、精神として生きること、それがほんとうのあり方であり、したがって、人間の善、人間の幸せ。

ところでものがまさにそのもの自身であるのは、そのものの作用、運動によってであるように、人間のそうしたほんとうのあり方も、人間のプラクシマによってこそ成り立つ。そして人間が苦しんではたらい、ほんとうに人間らしいあり方をつくり上げてゆく成り行き——人間がほんとうの人間になるプロセス——それが歴史だ。(中略)

そして今

今きみたちは、きびしくけわしいアポリアにぶつかっている。きみたち全部がもがき苦しんでいる。けれどもくぢけるな。あきらめるな。このアポリアこそ、きみたちがまだしつこく根を張っている非人間的なあり方を脱してほんとうに人間らしいあり方に跳び出る決定的段階なのだ。Materie の支配する非人間の世は、Kapitalism の近代で終り。つぎの世は Geist の光輝くほんとうの世だ。人間の人間としてのすばらしい歴史がそこから始まる。だからきみたちの今の苦しさ、つらさは、この跳び越える谷の深さ、大きさのためなのだ。しかし、きみたちが前に、上に進み、高まろうとはたらくかぎり、きっときみたちの力は宇宙の力だ。きみたちは、きっと勝つ。自信をもって、きみたちの前進をはばむものを突き破れ。

(わたしはこんどショウシュウされました。わたくしは、自分が何よりも人間として生き死ぬことを思うのであります。そして一人の人間としては、人間全体のために自分があることを思うのであります。その思いをこれからの自分の生活においてもできるだけあらわそうために、自分に言い聞かせたことばを、同じく人類の一員としておるあなたにものこして置きたかったのです。)

昭和18年11月26日 かん すえはる

この文書は、前掲書「友 その生と死の証し—哲学者 菅 季治」にも所収されてある。

(5) 「人生の論理」 34～35頁

(6) 同書35～36頁

(7) 人間について以上のあり方については、Ⅳ「現象的説明」にある、人間が完全なあり方としての自己同一を欲望することについてから叙述した。

(8) 以上については、「人生の論理」29頁ならびに菅が使用したスピノーザ「哲学体系」(小尾 範治訳 昭和2年発行、岩波文庫)を参考にした。小尾訳は、スピノーザ「エチカ」(上、下)(畠中 尚志訳 1951年9月発行 岩波文庫)とちがい、引用文のまま、よろこび→快、かなしみ→不快となっている。()内は小尾訳のとおりとした。なお、「人生の論理」にある傍点については、下線とした。

(9) 注(4)の「人類えのことは」の省略した部分には、つぎのことがあある。

「だから、人間の進み高まりゆくプロセスとしての歴史は、すべてのものをまさにそのものとしてあらせる宇宙の意欲のあらわれ。

これが人類よ、きみたちについてのぼくの考えだ。この考えから、ぼくはきみたちに呼びかける。人類よ、きみたちの歴史の歩みは、けっして速くはなかった。きみたちは、ずいぶん長い間、たちどまっていた。何度かつまずいた。逆戻りもあった。けれども、きみたちの歩みは、人間を人間であらせようと
する宇宙の望み——だれも何ものも妨げ阻み得ないはず」(下線は筆者)

(10) 「人生の論理」43頁 ただし()内のものは、湯浅 芳子訳 岩波文庫版からとった。

(11) 菅の日記には「"三人姉妹" トゥーゼンバッハのせりふ」とあるのみであるが、征くときを思わせる「せりふ」としては、少ないトゥーゼンバッハのものとしては、本文の引用のみである。湯浅訳、岩波文庫版、100～101頁

(12) 「人生の論理」44頁、注がきのは神西 清訳「かもめ。ワーニア伯父さん」(新潮文庫)によった。(132～133頁)

(13) 「人生の論理」44～64頁の本文を要約したものである。

(14) 以上の自他の争い、「闘争」については、草美社刊「人生の論理」にはふかい叙述がない。本文は1943年9月に書きあげたノート原稿に思索のあとがあるものを参考にし、要約したものである。なお、草美社刊のものは、シベリア抑留から帰国後、1950年3月22日～4月2日のあいだにノートから浄書、と日記にあるように、刊行を予想して、国会における引揚げにかかわる「特別委員会」喚問後の菅の痛切な感慨が述べられている。菅が遺したこれらの記録の分析については、後にあきらかにすることにした。また、本文に書いたが、菅の到達していた社会認識、ならびその方法論的基礎についての考察については、稿をあらたに論じたい。

(15) 以上の「資料」は、草美社刊「人生の論理」によるが、一部ノート原稿によって補った個所がある。